

会員研究

初代・紋十郎の東京・横浜乗込み（後編）

近藤 政次

五、明治36年の東京・横浜乗込み

(1) 東京・歌舞伎座での興業

前年に続き、明治36年8月、大阪・文楽座の桐竹紋十郎一行は上京し、同月の12日から歌舞伎座で興業に入った。明治座への出演の約束は前年に行われていたが、同座が改修工事となったことから歌舞伎座となったのである。これには人形遣いとして文楽座の櫓下をつとめる吉田玉造、紋十郎の息子桐竹紋太郎も加わった。

厳しい暑さにもかかわらず、連日の大入となった。太功記尼ヶ崎の段では紋十郎が操、紋太郎が初菊を遣い父子の共演となり、ファンを沸（わか）せた。紋太郎については「く色気のある動きは親父紋十郎に次ぐ大出来、将来、文楽座の立女形の位置を占めることは請合の出来」（8月15日、都新聞）と評している。

二の替では阿古屋三曲の段で紋十郎が阿古屋、玉造が重忠を遣い、さらに菅原伝授寺子屋の段では紋十郎が千代、玉造が松王丸を遣った。この年玉造は75歳、紋十郎は56歳であった。「紋十郎は菊五郎で、玉造は団十郎だと大阪の人は言うが、玉造はもう年だ」（8月16日、毎日新聞）など、玉造の演技に手厳しい評が相次いだ。

8月22日迄の予定だった歌舞伎座の公演は5日間の延長としたものの、紋十郎が暑気当りで欠勤となったことから8月23日限りで千秋楽となった。

(2) 横浜・羽衣座での興業

横浜の羽衣座での公演は9月1日から開場となった。横浜市の人口は32万4,800人を数える大都市であった。羽衣座の場代はさじき1人95銭、高土間85銭、中船60銭、平土間45銭、3階

20銭で木戸銭は大人20銭、小人12銭の料金であった。この年の大工の日当（県統計書）は上82銭、中78銭、下73銭であった。

9月1日から9月13日までの期間に演目は4回の替りとなった。客の入りは前半と同じく上々であった。横浜では女舞衣酒屋の段、弁慶上使、太功記、三人座頭、千本桜道行などが演じられた。

この9月13日には九代目市川團十郎が療養地の茅ヶ崎の別荘で死去し、東京の梨園、世上を騒がせることとなった。

大阪・文楽座は9月30日に恋女房染分手綱、桂川連理柵で幕を開けた。名人吉田玉造が死んだのは日露戦争が終わりを告げた明治38年10月12日、77歳であった。

(3) 再興への願いむなし

「人形芝居は独り大阪にのみ限るべからず彼に玉造・紋十郎あれば我にもまた吉田国五郎あるを知らずやとの意気込みにていよいよ東京の人形芝居を再興すべく本郷座に於て来る15日より旗揚げすることとなりしが久し振の興業なればと種々出物等をも吟味し」

（明治36年10月10日、毎日新聞）

文楽一座が京浜を去った後、在京の吉田国五郎一座がファンの期待にこたえ、奮起した姿を新聞が報じている。ここで「再興」との表現に留意されたい。前年と異なり、西川伊三郎の名が紙上にない。同紙10月21日では国五郎の批評が掲載されているが「阿古屋三曲の段は紋十郎よりも鮮やかで上をゆく出来ばえ」と賞賛している。なお、国五郎も女形遣いにたけていと記している。

しかし、本郷座の興業は好評だったものの、前年と同じように一過性で終わり、永く旗のひらめくことはなかった。

六、吉田国五郎と紋十郎の芸

明治45年3月11日から小田原の富貴座に3代目吉田国五郎一座の人形浄瑠璃がかかった。これを見物した横浜貿易新報の関係者がその評を同紙の3月15日号に寄せている。評では先ず富貴座にやってきた国五郎を代替りした人物物と思つて入場したが、昔（すなわち3代目国五郎）の国五郎で「80歳近い老人の様に思われた」

には日ごろ身の回りの面倒を見て
いるお付き女中たちも集めての宴
席が催されるが、いつも大いに盛
り上がるようである。

発駕当日の朝は早い。まずは重
臣たちを集め料理とともに三献の
儀により盃を交わす。今では神前
結婚式で行われる三々九度の祝の
ことであるが、もとはといえは出
陣の儀式である。直前には番頭、
組頭等々の面々から書院で挨拶を
うける。

出発時刻はおおむね辰の上刻、
朝七時すぎ、馬場で待全員が集ま
りお見送りする。供侍は先立ちを
含め四十名ほど。ただし、ほかに
各侍にはそれぞれに陪臣が、また、
多数の荷物持ち、馬廻役等々も加
わるので、行列全体は数百人とな
る。正確な人数を示す資料が見当
たらぬが、600人ほどではな
かったかと推定されている（「村
上市史」）。

江戸に着くと直矩は上野鳥越に
あつた中屋敷に入り、旅装束から
改めたのちに上屋敷である御成橋
屋敷に入る。到着時刻は大体丑の
刻、正午から午後二時頃であつた。
かれは行動的で、時にはその日の
うちにまずは越前家一門に無事

(13)

着のむね御礼の連絡をする。また、
老中に参勤挨拶のための登城日の
伺いを出す。数日後には江戸城に
出向き、将軍家綱や老中等の高官
たちに会い、無事参府できたこと
を報告するとともに、礼を伝える。

翌日にはこれまで江戸の留守を
守っていた家臣たちに褒美を渡
し、帰国すべき家臣には暇を申し
渡す。

3) 帰国

反対に江戸から帰国するとき
は、その時期についての承認、供
侍の決定、道中の諸準備等は同じ
だが、直矩が最も忙しいのは、関
係大名への帰国挨拶である。

まずは登城して将軍家綱にお暇
乞いをする。さらには将軍家一門
や大老酒井雅樂守を始めとして老
中たち、そのほか在江戸の親しい
大名から始まり、越前家一門等の
屋敷にも出向いている。また、将
軍家菩提寺である増上寺の参詣も
欠かせない。

家臣に対しては江戸屋敷の留守
を預かる家臣にそれぞれの役割を
確認し申し渡す。

国元の村上に着くと在国の総侍
がお出迎える。

寛文七年五月二十二日
「牛の后刻 村上城へ入 町端
より大糟毛の馬に乗 安福前よ
り歩行にて城へ入 侍ども不残
桜馬場に居並び逢う・・・」

帰城したあとは家老、番頭など
重臣を始めとして、目付、大役人
等々を集め、一人一人の名を挙げ、
留守および供のもの功に対して
熨斗鮑を遣わしている。

無事に帰国できたことは幕府に
すぐ報告しなければならぬ。参
勤御伺いと同じく、ここでも上級
家臣が使者としてその役割を担
い、直矩帰国の翌日には江戸に向
かい出発するのが慣例である。

その朝は使者のため、家老も含
めて送迎の食を共にする。このあ
と使者に託する書状を直矩自身が
したためる。老中への報告書や江
戸滞在中の諸大名への礼状を含め
ると二百二十通余りであつたと書
いている。

道中の疲れもまだある中、短時
間にこれだけ多くの手紙を用意で
きる体力にはやや驚かされる。

(以下次号)

